

第2章 中国問題担当記者への道程

新聞記者、そして香港留学へ

人には、それぞれの「心の軌跡」がある。ここで一言、なぜ新聞記者の道を選んだのか、したためておきたい。

同じ目の高さで書く

私の心中には、さまざまな社会で生きる、さまざまな人間模様を見つめていきたい、という欲求が強く働いていた。そして、それぞれの人をできる限り、同じ目の高さでとらえ、そこにある大切な発信をえぐり出して報道したい、という願いがあった。

少し具体的に言えば、その根本は次の二点に要約される。一つは、社会的な地位の高低や貧富の差を超えて、人間は皆平等であるということ。当時の自分には、「一定の節度は守らねばならぬが、相手が総理大臣でも、『ニコヨン』（<注>参照）のおじさんやおばさんでも、皆同じ人間だ。己の至らぬ点は、誰に対しても頭を下げて教えを請い、不条理なことは、誰に対しても、きちんと意見を述べ、批判すべきことは批判したい」という気持ちがあった。もう一つは、明治維新以降、「脱亜入欧」の中で近代化を進めた日本の、多くの人の心に宿ってきた、欧米諸国を「将校」、日本を「下士官」、他のアジア諸国を「兵卒」と見なしがちな精神構造を、何とかして払拭しなければならない、という要請であった。「言うは易く、行うは難し」であった。実際には、一筋縄でいかぬ複雑な人間社会や国際政治の現実に翻弄され、幾度も脱線しそうになった。しかし、わが身を顧みて、この基本的視座だけは、いまも変わっていない。

さて、朝日新聞社に入社した私は、まず浦和支局、次いで山形支局で四年半余り、新聞記者としての基本的訓練を受けた。そして、東京本社 of 社会部に戻り、日本の中心部で、「事件記者」のはしくれとなった。この間、人間として、記者として、優れた先輩や同僚に囲まれて過ごすことができたことは、二十代の貴重な「無形の財産」となった。

社会部で、抜いた抜かれたの毎日を繰り返して、一年余りたったある日、私の仲人でもあった当時の田代喜久雄・社会部長（後の東京本社編集局長、朝日テレビ社長、故人）から、「語学留学生として、香港へ特派する」という辞令をもらった。中国語をしっかりと勉強し、かつ中国人の物の見方、考え方を学んでこい、ということだった。

大陸と台湾の狭間で

当時、日米をはじめ、西側の主要諸国は、第二次世界大戦後の内戦で台湾に逃れた中国国民党政権（「中華民国」）を承認。一九四九年十月一日に誕生した新生の中国共産党政権（「中華人民共和国」）との国交関係はなかった。ともに、中国唯一の「正統な政権」を主張する国共双方は“宿敵同士”であり、台湾海峡を挟んで、厳しい対立を続けていた。

外交関係がないとはいえ、日本の報道機関のほとんどが、中国大陸の動向には大きな関心を寄せていた。しかし、米ソを頂点とする戦後の東西冷戦体制下で、社会主義の道を歩む新生中国は、西側のいわゆる“ブルジョア新聞”の記者の入国は、ごく特殊なケースを除いて、厳格にこれを拒否していた。かといって、国共の深刻な政治的対立の中で、「語学研修」とはいえ、台湾へ留学生を派遣するのはどうか、というためらいが、朝日新聞社の中にはあった。だが、世界一の人口を抱え、歴史的にも地理的にも身近に感じてきた中国大陸の動静を研究する人材の養成は、新聞社としては不可欠な重要事項であった。「苦肉の策」とはいえ、大陸と台湾の狭間にある中国人主体の社会、香港への語学研修生の派遣は、こんな事情の中で行われたと言ってよい。そして、第一回の留学生として、大学の先輩でもあった伊藤斉記者（現在、麗澤大学教授）が、派遣され、私は第二回目の研修生となっ

たのである。

錆びついた中国語

一九六二年（昭和三十七年）六月、期待と不安を胸に、生まれて初めて香港の土を踏んだ。そして、香港大学の東方研究院に籍を置き、馬蒙院長（後の中華全国政治協商会議委員、故人）の指導の下で、中国語と中国事情の研修に励んだ。

香港が英領植民地だったこともあろう。当時の東方研究院には英国、インド、カナダ、オーストラリアなど英連邦諸国を始め、米国、フランス、西独などから外交官、大学教授、軍事専門家、宗教関係者が来ていた。日本からは、外務省とアジア経済研究所が若手の逸材を派遣しており、朝日新聞社を加え、三人が研修を受けていた。

大学卒業後の六年余り、新聞記者の基礎修業に全身を打ち込んでいたため、私の中国語（俗に言う北京語、中国大陸では「普通話」、台湾では「国語」と言う）は、すっかり錆びついていて、しかも、広東語が一般庶民の日常語となっている香港では、言葉に磨きをかけるのは大変だった。おまけに、香港には上海、山東、四川、湖南、福建と、中国大陸各地の人々が移り住んでおり、彼らのしゃべる「北京語」には、それぞれの「なまり」があった。恥ずかしい話だが、赴任早々は、香港の中国人の話す「北京語」が、二割程度しか分からぬという悲惨な状態だった。こんな中で、最初の半年間は、せっせと大学に通った。まず三ヶ月間は中級、次の三ヶ月間は上級で講義を受けた。午前中の三時間余り、新聞や小説を題材に、中国語と英語だけの授業をたたき込まれると、頭の中は“過飽和状態”になった。

香港では、中国人の家庭に下宿していた。学校から戻り昼食をとると、一時間ほど午睡をとるのが習慣となった。土曜日と日曜日を除き、午後は二時すぎから毎日、家庭教師についた。李孔興さんという小学校の先生だった。中国の厦門大学で、教育行政学を専攻した人だった。下宿で、簡単な会話の練習と、短編の名文集を学んだ。李さんは、いかにも教師らしく、しつこいほど、私に名文の暗唱を強いた。

夕方には、決まって繁華街へ出て、庶民的な「飯店」（レストラン）で食事をとった。よく李さんの友人たちを誘い、季節の料理をつつきながら、ビールや老酒を飲んだ。李さんを始めほとんどが日本語のしゃべれぬ人たちばかりで、最初のうちは、もどかしい日々が続いた。

二つの「飛躍」を体験

外国報道に携わる記者にとって、まず欠かせないのは、異国の人々とのコミュニケーションである。相手が何を言い、それに自分がどんな応対をするか。「聞く」と、「話す」と、それは、国際記者の基本的な「技術」として、絶対的な必要条件である。

不思議なことに、五里霧中だった私の中国語にも、やがて希望の光がさしてきた。それは奇妙な体験だった。もたもたしながらも、努力を続けていると、ある日、忽然と「飛躍」が訪れた。第一回目は、赴任の三ヶ月後だった。中国人の話す中国語が、急に自分でもびっくりするほど、よく聞き取れるようになった。そして、第二回目の「飛躍」は、六ヶ月後にやってきた。今度は、自分の思っていることを、何とか中国語で表現できるようになった。

そんなとき、香港大学の上級講座で、しめくくりの筆記試験と口頭試問があった。絶妙なタイミングだった。口頭試問では、そのころ話題となっていた中印紛争、中ソ間の亀裂、英国の EC 加盟問題などについて、三人の教授たちから、矢継ぎ早の質問を受けた。十分とは言えなかったが、いずれも自分の見解を一通り、中国語で表現することができた。通知簿には、「聞く」「話す」「読む」「書く」のそれぞれについての評価が記されていた。いずれも「ヴェリー・エクセレント（Very excellent）」であった。思わず、心の中で「万歳」

を叫んでいた。

留学の期間は一年だった。前半の六ヶ月で東方研究院を辞した私は、後半の半年間を、新聞記者の目で、香港の社会探訪に主力を注いでいった。この間は記事を書かなくていい、ということだったので、自由に活動できた。

一九六二年六月から、翌六三年七月まで。それは、香港の中国人社会で明け暮れた一年だった。この中で、日本にいたころ本で読み、訪中者から聞かされていた中国像と、大陸に肉親や友人を持つ香港の人々を通じて感得した中国像との間に、大きな隔たりがあることを知った。しかも、そこに、中国の激しい政治的変動の傍らで、たくましく、したたかに生きる、香港の中国人の姿を見た。

それは、私自身が、中国と中国人に対する感性的認識の領域を、少しずつ広げていく一つの過程でもあった。

<注>ニコヨン

戦後の一時期言われた日雇労働者の俗称。もとは職業安定所からもらう定額日給が二百四十円（百円を「一個」として、二個四）だったところから言われ、当時の労働者としての最低賃金だった。

二者択一でない生活の知恵

振り返れば、私の香港留学時代（一九六二年六月一六三年七月）は、中国大陸で五九年から三年連続の「自然災害」が起り、大躍進・人民公社政策の挫折で、一連の調整緩和政策がとられていた時期だった。その結果、厳しい出境制限下にもかかわらず、香港への流出者が増え、ここが“難民の吹きだまり”と言われ出したころだ。

衣食が足りてこそ

それだけに、社会探訪を続けるうちに、大陸の政策を批判する人が、かなりいることが分かった。当初、私は「祖国の革命と建設を放棄して出てきた人たちに、そんなことを言う権利があるのか」という気持ちにかられていた。赴任前に書物で読み、訪中者たちから聞いていた中国像と、あまりにもかけ離れていたからだ。だが、数々の証言の中で、その気持ちは次第に薄れていった。

六二年十二月、「親戚の家に大陸からバアさんが来た」という知人の知らせを聞いて、早速会いに行った。その生活状況を尋ねると、「私は年寄りだし、働けないから配給も少ない」と前置きして、

「一日に二回はゆるいおカユ。年をとってもおなかは空きます。副食はほとんど野菜だけ。貴重な配給の油の中には、鉄ナベの上で蒸発するような質の悪いものもあります」

と語った。衣類の悩みも深刻だと言う。

「五人の一年分の配給量を全部合わせて、大人なら上着一つ、子供なら上、下一着をつくるのがやっとです」

これは、ほんの一例だ。当時、大陸から出てきた人たちは、異口同音に「有的吃就算了、有的穿就算了」（食べるものさえあればいい、着るものさえあればいい）と言った。われわれの感覚で言えば、最低の生存権を意味するこの言葉は、その後ずっと、私の耳から離れなかった。

人民公社化を批判

こんな中で、香港の人たちの多くは、次のような不満をあらわにしていた。①大陸の同胞たちの食物や衣類が不足していること、②五千年も「中華民族」の生活に染み込んできた伝統・文化が急激に破壊されてきたこと、③お上による政治・思想の統制が厳しすぎ、

精神的圧迫を感じる一。

農業問題専攻の大学教授、Tさんは、

「中国には有史以来、自然災害のない年はなかった。それに、近代の百年余りは“兵災”（戦争による災害）の連続だった。中共政権の成立後、国内での“兵災”はなくなったのに、なぜこんな苦難が続くのか」

と言った。そして農業の急速な集団化、特に私有地を全然認めない大規模な人民公社化は、長い間“個人経済”になじんできた中国人の生活様式を、性急に切り崩すものと批判。これが農民の生産意欲をかなり減退させたとし、「自然災害と言うが、実際には人災の要素が大きい」と指摘していた。

したがって、一、二年来の農業重点主義への転換と、一連の調整緩和政策——一部私有地の承認。新開拓地は開墾者に与える。養豚、養鶏など個人副業の容認。それらを売買する自由市場の許可。人民公社の組織内容の緩和措置などは、香港の人々の間で歓迎されていた。

どっちみち中国人

ところで、こんな場面にもぶつかった。親しい中国の友人たちと、なじみの上海料理屋で紹興酒を酌み交わしているときだった。

「何も、政治や思想のことで、くよくよすることはない」

背後の席から、こんな話が聞こえてきた。さりげなく振り返ると、四十がらみの労働者ふうのおじさん。その前で、二十歳そこそこの若者がカタクになっていた。一目で、大陸から来て間もない青年と分かった。

「中共が来れば、中共に従えばいい。台湾が反攻してくれば、台湾につけばいい。オレたちは、どっちみち中国人だ。ここで生きていくためには、自分にしっかりした技術を身につけることだ」

おじさんは、こんなふうにくましたてた。二人が立ち去った後、友人の一人が、こんな話をしてくれた。

数年前、香港で豚肉の値段が法外につり上がった。中国人にとって、豚肉は欠かせぬ食料品だ。当時、台湾の方では「中共と取引する業者には豚を売らない」と言い、大陸側も台湾との取引関係者をボイコットした。香港の業者たちは、しばし困惑の様子だったが、間もなく自衛手段を編み出した。甲と乙とが組んで、甲は大陸、乙は台湾と取引した。そして安い方からしこたま豚肉を仕入れ、必要なだけ融通し合ったということだ。

ずいぶん、ちゃっかりしている。あまりにも利己的で節操がない、というのが第一印象だった。日本人はとかく、白か黒か、是か非か、正か邪か、善か悪かといった「二者択一」の尺度で、ものを判断しがちだ。しかし、香港で生活するうち、「人間の社会には、いろんな基準や尺度があるものだな」と思うようになっていった。

忍耐強さと同族愛

半面、香港の中国人の忍耐強さと、熱い同族意識には、感嘆させられたのも事実だ。

一九六三年は、香港が未曾有の水飢饉に見舞われた年だった。長い日照りが続き、香港の貯水池の水は、ことごとく涸れてしまった。当時は大陸からの水の供給にも限度があり、給水制限は、二日に一日から、三日に一日となり、ついにその一日も、たった二時間という深刻な状態に陥った。

私は当時、香港島西部の北角（パッコ）という繁華街の、あるビルの六階に住む、Cさん宅に下宿していた。この貴重な二時間は、どこでも一斉に水道の蛇口を全開するので、林立するビルの上層部に住む家庭では、貯水が大変だった。下宿先もそうで、ドラム缶のように大きなポリバケツ二つに、水を蓄えるのがやっと。しかも、私を加え七人住居だった

ので、この水を三日間もたせるのは一苦勞だった。

米のとぎ汁で、野菜を洗い、さらに食器類の油を落とす。汗を拭いた水で衣類を洗濯し、その後の水も残した。トイレ用に使うためだ。

もう一つ、感心したのは、大陸の同胞たちへの懸命な支援ぶりだった。金持ちはもちろん、一般庶民も境遇に応じて、自分たちの生活を極度に切り詰め、大陸にいる親子兄弟、親戚、友人へ生活必需品を送り続けた。このため、当時の香港には「代寄郵包業」（小包代送業）が、街中にあふれていた。身近な人たちへの思いはどこも同じだと思ったが、その献身的な同族愛には、頭の下がる思いだった。

香港社会の弾力性

この社会が持つ「弾力性」にも、格別なものを感じた。香港は基本的に「レッセフェール」（自由放任）の世界。だから、日本とは違って、貧富の差の際立つ、典型的な資本主義社会である。だが、香港の面白さは、所得の差に対応した生活のシステムが、実にきめ細かく機能していることだった。

その一つが、交通手段である。大金持ちは運転手付きのロールスロイスで往来する。その次がベンツやジャガー、さらにそれに続く自家用車族だ。車を持たない者はタクシーを利用する。タクシー代が出せない人はバスに乗る。だが、バスが不便な者には、手を上げれば、どこにでも停車するミニバスがある。バスよりもっと安い庶民の乗り物が、二階建ての電車である。

食物や娯楽もそうだ。巷へ出ると、ピンからキリまでの飲食店がある。レストランに入れぬ者には、露店街が待っている。香港に特徴的な娯楽施設の一つが、「夜總會」（ナイトクラブ）だ。ここにも、一晩で庶民の給料が数ヵ月分も吹っ飛んでしまう超高級なクラブから、その庶民でさえ楽しめる安価な「夜總會」が、繁華街の随所にあつた。

植民地・香港は、やはり特殊な、ゆがんだ社会なのだろう。しかし、その中で、日本人の思考では計り難い、中国人の生きざまを学んだ気がした。「ものを見る基準は、決して一つではない」ということ。香港の中国人が、この社会のさまざまな試練に耐える、したたかな「生活の知恵」を身につけているということ。そして、ちゃっかりした一面をのぞかせながらも、貧富の差を超え、その境遇に応じて、大陸にいる同族たちへの熱い思いやりや支援を、決して忘れていないこと—ここには、あくなき「生」への執着、雑草のようにたくましい、人間肯定の息吹があつた。

六三年七月初旬、一年間の香港での留學生活を終え、東京へ戻つた。赴任の半年前に結婚していた私は、すでに一児の父親になっていた。羽田空港で、妻に抱かれた長男のつぶらな瞳を見たとき、大きな喜びと、新たな責任を感じた。そして、私の留守の間、一人でお産と育児に明け暮れた妻の労苦に、限りない感謝の念を覚えた。

国際情勢の転換と日中接近

香港留學から東京本社へ戻つた私は、社会部から外報部へ移つた。そして、一九六三年夏から六六年秋までの三年余り、東京から国際情勢をウオッチすることになった。

中国問題（中国大陸、台湾、香港などを含む）では、何が起こっても即応できるようにと、経験豊富な先輩諸兄の薫陶を受けた。とりわけ「中国本土の動き」を追うことが、私に課せられた大きな命題であつた。

「ケネディ暗殺」に遭遇

とは言え、外報部は世界全体が相手の部署。そんな中で、最初にぶつかった大事件が「ケ

ネディ暗殺」だった。六三年十一月二十三日未明、みんなの寝静まった編集局内で、たった一人、深夜勤後の「ラジオ番」をやっていたときだ。

「チン、チン、チン……」

と、チッカーの音が至急電を告げ出した。午前三時半すぎ。南ベトナムでよく軍事クーデターが発生しており、「また始まったか」と軽い気持ちでいた。ところが、AP、ロイター、AFP—がそろって鳴り出し、けたたましく増幅していった。何事か、とチッカーをのぞくと、

「プレジデント ケネディ ウォズ ショット フライデイ」

という文字が飛び込んできた。ダラス空港から市内に車で移動中の出来事だ。続いて、隣席にいたジャクリーン夫人が「オーノー」と叫んだ、と外電は伝えてきた。まだケネディ大統領の生死は不明だったが、死の予感が頭をよぎった。

当時は、各新聞社間の降版協定がなかった時代だ。とっさに①朝刊の輸転機を止める手配をとり、②外報部長とデスクに連絡、③懸命に外電の翻訳にとりかかる。そこへ、ふろ上がりの社会部の「子供さん」（原稿係の勤労青年）の姿が見えた。大声で呼び止め、仲間と協力して整理部、政治部、経済部、社会部、写真部のデスクへの連絡を頼んだ。

「ケネディ撃たる」の第一報は、最終版の追っかけに間に合い、何とか面目を施した。

子供さんたちの奮闘で、午前六時前、編集局はかけつけた各部の記者たちで騒然となった。おかげで、いち早く号外ができ、夕刊も一面から社会面まで「ケネディ暗殺」の関連記事で埋まった。

その夜、先輩諸兄から「吉田君、他紙を圧倒してるぞ。これで外報部から離れられなくなったね」と声をかけられたときは、ジーンとこみ上げてくるものがあった。

米ソ接近と中仏握手

六三年から六四年にかけて、国際情勢は大きな変化を露呈し始めた。六三年七月には、モスクワでの中ソ両党会談が決裂、国際共産主義の総路線をめぐって、中ソ論争が本格化していく。一方、核保有国の米英ソ三国間で、部分核実験停止条約が調印され、他国への核拡散を抑制する手だてがとられた。

半面、後発の核保有国だった「ド・ゴールのフランス」がこれに反発。同じく米ソの核覇権に反対する「毛沢東の中国」との接近が始まり、翌六四年一月には、中仏間に外交関係が樹立された。この間、米国のベトナム戦争への介入は、日ごとに深まっていった。深刻なジレンマの中で、同年十月には「パックス・ルッソ・アメリカナ」（米ソによる平和）に動いたソ連のフルシチョフ書記長が解任された。

これに追い打ちをかけるように、中国が第一回目の核実験を行い、同時に核兵器全面禁止の世界首脳会議を提唱した。

第二次世界大戦後の東西冷戦体制下で、ソ連との「一枚岩の団結」を誇示していた中国は、対中国、対ベトナム包囲網をとり続ける米国との対決を一段と鮮明にする一方、ソ連の新指導部とも、これを「フルシチョフなきフルシチョフ路線」として、対立の姿勢を深めていった。だが、その中でフランスとの握手を果たした中国は、米国と同盟関係にありながら、ベトナム戦争拡大を懸念する日本国内の動きをにらみつつ、積極的な対日接近政策をとり始めた。

当時の北京の国際戦略は、「中間地帯論」の展開にあった。すなわち、資本主義と社会主義陣営の中間地帯にある、アジア・アフリカなどの第三世界を「第一中間地帯」とし、資本主義社会でのフランスや日本を「第二中間地帯」と見なし、これら諸国との友好関係を推進しようというねらいであった。

相次ぐ中国要人の来日

実際、この期間に、中国大陸からは、対日関係の要人が次々と来日した。当時、台湾に拠点を持つ「中華民国」を、米国にならって中国唯一の合法政権としていた日本政府は、中国本土の重要人物と接触する機会はほとんどなかった。そのため、来訪者の取材は、新聞社では政治部よりも、外報部や経済部の担当分野となるが多かった。

デスクの指示もあり、私は若さと馬力にまかせ、内勤の合間をぬって、これら要人の動静をカバーしていった。そのころ、『朝日新聞』の夕刊には、外国の著名人を紹介する「こんにちは」という欄があり、よくここにインタビュー記事を載せた。ちょっと思い出すだけでも、南漢宸（中国国際貿易促進委員会主席、故人）、趙安博（中日友好協会秘書長）、蕭向前（中日友好協会常務理事）、王冶秋（中国国家文物局長、故人）＝肩書はいずれも当時のもの＝といった人々の顔が浮かんでくる。

しかも、これらの会見からは、大きなニュースも飛び出してきた。特に印象に残ったのは、六四年二月二十一日、日本アジア・アフリカ連帯委員会の招きで来日中の趙安博・中日友好協会秘書長との会見だった。

同氏は戦前、旧制第二局等学校に留学。戦後も紅十字会代表、漁業問題代表、原水爆禁止世界大会代表などで何度も来日。六三年十月に誕生した中日友好協会では、郭沫若名誉会長、廖承志会長（ともに故人）、張香山副会長（前中日友好二十一世紀委員会中国側首席委員）らとともに、対日関係の立役者の一人として活躍していた。

「対日賠償あてにせぬ」

中仏の外交関係樹立、それに続く台北の国民党政権の対仏断交は、日本の対中国政策にも、大きな波紋を投げかけていた。そして「対中打開」をはかる上で、北京の共産党政権が、対日賠償請求権を留保していた点に、日本人の多くが不安な気持ちを抱いていた。

この点を質したとき、趙安博氏は、いったん「私には発言する権限はない」と言った。だが、重ねて追求すると、「これは、周恩来総理の権限だが」と、特に前置きした上で、「わが国は賠償によって社会主義建設をしていくような考えは持っていない」と言明した。これは、中国本土の責任ある地位にある人物が、対日賠償放棄を示唆した、初めての重要発言であった。

翌二十二日付の『朝日新聞』紙上には、この会見記事が特ダネとして一面トップを飾った。「趙安博氏“日中打開”を語る」の横見出しに、縦二本の大見出しで、「国交正常化を楽観」「社会主義建設に賠償あてにせぬ」とあった。さらに、中見出しで「記者交換実現に努力」の活字が躍っていた。

銀座・東急ホテルでの一時間半に及ぶ単独会見の席で、趙安博氏は中国本土の対日基本政策とともに、今後の具体措置にも言及。特に「貿易拡大のための民間駐在員の交換、相互理解を深めるための記者交換などは非常にいいことで、早く実現させたい」と強調していた。

揺れる日本の対中政策

しかし、こうした大陸側の対日接近政策には、台湾側も黙ってはいなかった。日台関係は、すでに六三年八月、輸銀融資付きの「ビニロンプラント」の対中輸出事件で、大きな低迷状態に陥っていた。しかも、中仏国交樹立（六四年一月）直後の、中国本土の積極的な対日平和攻勢は、これに輪をかけるものだった。わが国の自民政権内部でも、対中政策をめぐる一段と激烈な賛否両論が生じた。

こうした中で、二月下旬には、日本政界の元老・吉田茂元首相が訪台、蔣介石総統と会見した。そして、この答礼として、長年、蔣総統の片腕として活躍してきた大物、張群総統府秘書長の来日が日程にのぼってきた。

八月十二日、張群秘書長は来日した。翌日、美土路昌一社長（故人）に同行、台湾側主

催の招宴パーティーに臨んだ。来席の池田勇人首相（故人）は、満座注視の中で、張群氏と抱き合い、熱い歓迎の意を表した。

ところが、その夜、中国本土から孫平化・対外文化協会副秘書長（前中日友好協会会長、故人）を首席代表に、日中貿易拡大のための民間駐在員五人が、初の長期駐在者として入国した。そして同年秋には、報道界念願の日中記者交換も実現した。

この背後には、高碓達之助、松村謙三、岡崎嘉平太、古井喜実、田川誠一氏らをはじめ、社会制度の相違を超えて、日中両民族の友誼にかけた先達の労苦があった。

国際情勢の大きな転換の中で、日本の対中政策も、揺れながら、変化の兆しを見せていった。

素顔を見た毛沢東の会見記

中ソ対立、米ソ接近、中仏の握手、そして激化の様相を深めるベトナム戦争。国際情勢の大変転の中で、一九六〇年代前半の中国の内政は、どう動いていたのか。東京から見ていた当時の中国の姿を、かいつまんでしたためておこう。

農業生産の回復に奏功

六〇年代初頭の中国大陸は、五八年に打ち出された大躍進・人民公社政策のつまずき、五九年からの三年連続の「自然災害」で、深刻な“食糧危機”に陥っていた。さらに、ソ連の基本建設への援助打ち切り、技術者の総引き揚げで、重工業部門も大きな痛手を被っていた。

このため、党中央は、対ソ依存の重工業重点主義から、民生安定のための農業第一主義に方向を転換した。

従来、「一大二公」（より大きく、より公共的に）で推進してきた人民公社の規模を、公社一生産大隊一生産隊の三級所有制に再編成し、実権を末端の生産隊（自然村落に相当）に移管する後退策を採用した。

同時に、先にも述べた一連の調整緩和政策— 一部私有地の承認、新開拓地はその開墾者に与える、養豚、養鶏など個人の副業を認める、それらを売買する自由市場の承認などがとられた。

これらは、農業生産の面で民衆の生産意欲を回復させ、食糧事情は六二年、六三年と着実に好転。六四年の穀物生産量は二億トンにも達した。党中央の第一線で実務を朱配していた劉少奇国家主席、鄧小平総書記らの業績だったと言える。

半面、“自由化”の中で、農民は私有地や個人的副業の生産に力を入れ、公有地には積極性を示さぬ傾向を生んだ。「ヤミ売買の横行」「カツギ屋の出現」など、いわゆる社会主義とは逆行する現象も出てきた。

自力更生と階級教育へ

ソ連に現れた変化にかんがみ、当時第一線の背後で舵をとっていた毛沢東主席は、こんな事態を憂慮し、早くも六二年九月の中国共産党中央委員会総会で、「階級闘争の必要性」を強調し始めた。

同会議では、①現代修正主義（フルシチョフ路線）反対、②階級闘争強化、③農業を基礎とし、工業を導き手とする国民経済の発展をうたったコミュニケが出された。これは、「国内での階級教育の実践」とともに、従来の対ソ依存路線から脱却し、「自力更生による経済建設」を指向するものであった。

翌六三年には、農村を重点に、「社会主義教育運動」が始まり、中ソ論争の本格化と呼応しつつ、全国的に拡大されていった。六四年に入ると、階級的な自覚を持った労働者、農

民、兵士に依拠して成果を上げた大慶油田、大案人民公社、人民解放軍に学ぶ運動が進められた。さらに、その象徴的な実例として、常に毛沢東思想を学習し、人民大衆に奉仕して死んだ解放軍兵士「雷鋒に学ぶ」運動が、全国的に展開された。

一方、工業分野では、対ソ依存で受けた“苦い経験”を教訓に、「自力更生を主とし、対外援助を従とする」方針で、建設が進められた。工作機械類などは自己の設計で製造し、これらを基礎に、西側先進諸国との貿易発展で補う政策をとった。フランス、イギリス、オランダ、イタリア、日本などからの高級技術の導入、プラント施設購入などは、特に中国が必要とした重化学工業分野の発展を促す上で、一定の役割を果たした。

毛主席、スノーと会見

六四年十月一日、建国十五周年を迎えた新中国の「国慶節」には、過去数年間にはなかった「自信」と「落ち着き」が見受けられた。国内建設での調整工作が効果を上げ、将来の計画に一応のメドがついたこと、国際情勢が、中国側に有利に動き出していたからだろう。対外関係では特に、中ソ論争の過程で、国際共産主義運動は、第三世界の「被圧迫民族」の解放支援に結びつかなければならない、と執勘に強調していた中国の姿勢が、アジア・アフリカ（AA）諸国の間に同調者を増やしていた。

実際、国慶節の式典には、AA 諸国から首脳陣が続々と列席。また、西側諸国からも多彩な代表団が参加した。六三年暮れからの周恩来首相の AA 十三カ国訪問、インドネシアの国連からの脱退、フランスとの国交樹立、日中関係の好転なども影響していたと言えよう。

毛主席は、こうした内外情勢を見据えつつ、延安時代からの三十年来の米国の朋友、エドガー・スノー氏を招請。六五年一月九日、人民大会堂で四時間にわたる異例の会見を行った。この会見記録は、世界戦略だけでなく、彼自身の人生論まで縦横に語った“人間・毛沢東”をほうふつとさせるものだった。朝日新聞社は、いち早くこの版權を獲得、同年二月四日から七回にわたり、会見記の全文を掲載した。

重大なポイントは二つあった。一つは、ベトナム介入を深めつつある米国への誠意ある忠告とメッセージ。もう一つは、共産主義者の立場を超えて語った、屈託のない彼自身の「天命観」であった。

米国へのメッセージ

まず、「米国への発信」から紹介しよう。スノー氏は、会見を総括した冒頭の部分で、次のように記している。

「ことし七十一歳の毛主席は、話の間に繰り返し、中国革命を促進させ、また現在の東南アジアに対しても同様の恩恵を分かち与えている外国の侵略者に感謝すると語った。彼はまた、中国は自分の領土以外には軍隊を出しておらず、自国が攻撃されぬ限り誰とも戦うつもりはないと言った。サイゴンに米国の兵器や兵員が送り込まれれば送り込まれるほど、南ベトナム解放戦線（ベトコン）が勝利を収めるための装備や教育も、それだけ早まるだろう。彼らはもはや、中国軍の援助は必要としない—こんな意見も述べた」

時の焦点「ベトナム」には、多くのスペースが割かれた。要約すると、次の五点になる。
①ベトコンは自らの力で勝利するだろう。②北ベトナムでは戦争は起こらないだろう。③中国が戦うのは、米国が中国を攻撃した場合だけだ。中国は国内の仕事でとても忙しい。④ベトナム問題を解決するジュネーブ協定の条項を実現するため、国際会議を招集できるシナリオは（現段階では）四つある。そのうちの一つには、南ベトナム駐留の米軍の撤退を前提条件としない場合も想定される。⑤米中両国が再び手をつなぐ日は必ずやってくるだろう。

これらの発言には、公式の報道機関の強い対米非難の調子とは異なる柔軟性が感じられた。抜き差しならぬ段階にきた中ソ対立、国内建設での調整措置がようやく奏功し始めた

局面での、戦略家・毛沢東の大局的な判断が出ている、と私には思えた。

将来、若い世代に託す

当面の内外情勢を語り終えたあと、毛主席は自分自身と中国の来し方、行く末を淡々と語っている。共産主義者の立場を超え、まさに“人間・毛沢東”の素顔をのぞかせた場面だ。雰囲気尊重して、会見記の大筋を、そのまま引用させていただこう。

「しばらく口をつぐんでいた毛主席は、彼の振出しが小学校の教員だったことを知っているだろう、と話し始めた。

あのころは、戦争をすることなど考えもしなかった。共産主義者になろうなどと思ったこともなかった。……どんな偶然が重なったあげく中国共産党の創立を志すようになったのかと、いままでにも時々不思議に思ってきた。……重大だったのは、ただ、中国が帝国主義や封建主義、官僚資本主義などによって圧迫されていたということだけだ。それが事実だったのだ。

『……以前よりは楽な条件のもとに生まれた若い世代がどうなるのかを、多くの人々は疑問に思っています。あなたはどう考えますか？』

自分にも知りようはない、というのが主席の答えであった。恐らく誰にもわかるまい。しかし二つのことが考えられる。革命は共産主義をめざしてさらに進められるかも知れない。もう一つは、いまの若者たちが革命を否定するかも知れないということだ……。

もちろん反革命は望まないが、将来のことは将来の世代が、その時の条件に従って決めることであり、それがどんな条件かは現在のわれわれには予想できない。長い目でみれば将来の世代は、現在のわれわれよりも頭がいいはずだ。問題は彼らがどんな判断を下すかで、われわれの判断ではない。今日の青年たちと、そのあとに続く未来の青年たちは、彼ら自身の価値判断に基づいて、中国革命の成果を評価することだろう。

ここまで話した毛主席は、声を落とし、半ば目を閉じた。地球上における人間の条件は、この上なく急速に変わりつつある。いまから千年もたったら、マルクスもエンゲルスも、またレーニンでさえも、きっとバカげてみえることだろう—こう彼は語るのだった」

毛沢東の「米国への発信」と独特の「天命観」には、時空を超えた味わい深い哲理があった。しかし、現実には皮肉な展開を見せていくのだった。